

中里の

妙見さん

平成二年三月五日号

三月十四日は、中里四丁目にある本妙寺の妙見さんの大祭です。今回は妙見さんのお話を郷土史家の鈴木富男さん（中里町三）に伺いました。

星の王様北極星

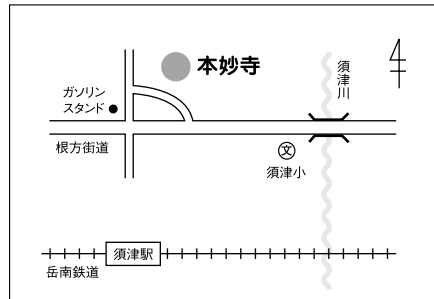
磁石も地図もない昔々のことです。人々は夜空に輝く北極星を見て東西南北を知り、旅をしました。

そして、満天にきらめく無数の星が、北極

星を中心に回っていることから、人々は北極星をたくさんの星の王様と考え、信仰をするようになった。また、北極星のそばには、ひしゃくの形をした北斗七星があります。人々は北斗七星の向きで季節を知り、農業の目安としていました。ですから、北極星と北斗七星は、生活に強く結びついていたのです。

お釈迦様が菩薩の位を

そのうち、「こうしていろんな事を示してくれる北斗七星は、北極星が姿を変えて私たちに教えてくれているに違いない」と考えられ



▶ 妙見尊像



るようになりました。

そこでお釈迦様は、人のために役立ち、多くの人を救ってくれる北極星に菩薩の位を与えました。

今でも続く妙見講

本妙寺の妙見さんは、明治時代に大阪の能勢のせから迎えたものです。高さは三十センチぐらいで、右手に剣を持ち、亀の上に座っています。

この形は能勢の妙見様と同じで、本妙寺の書物によれば、「朝日妙見大菩薩」という名がついています。

本妙寺の周りには昔から信心深い人が多く、今でも妙見講に属する四十人ぐらいのおばあさんが、毎月十四日に供養を続けています。お寺には、祭りに配ったお札の版木なども残されています。

語ってくれた方

鈴木富男さん